

漱石文庫資料修復事業報告

菊地 良直, 大原 理恵

はじめに

平成 29 年度、朝日新聞文化財団の実施する「文化財保護活動助成」及び、東日本鉄道文化財団の行う「地方文化事業支援」による援助をいただき、漱石文庫資料 5 点の修復を行うことができたので報告する。

当館所蔵の漱石文庫は、明治・大正期の日本を代表する文学者・夏目漱石の旧蔵書である。受入当時(昭和 19 年(1944))の本学図書館長で、漱石の愛弟子でもあった小宮豊隆(1884～1966)の尽力により有償譲渡された。

漱石文庫は、漱石の創作活動と密接な結びつきをもち、漱石による多くの書入れが残る点が大きな特徴である。コレクターとしての収集姿勢は希薄で、自身の関心や必要に基づいた書物を中心に集めたとされる。このため、個々の資料の稀覯性は必ずしも高いとは言えない一方、上記の点が、学術的に貴重とされる。

漱石は、東京帝国大学の英語教師時代に『吾輩は猫である』『坊ちゃん』等を表し好評を得ると、その後大学教師の職を辞して朝日新聞社の専属作家となる道を選んだ。以降、さらに数々の名作を生み出すこととなる。

またここ仙台の地は、漱石門下が多く活躍し、新たな学術文化創成期を支えるという縁を有している。小宮豊隆をはじめ、『三太郎の日記』で有名な阿部次郎(1883～1959)や「荒城の月」の作詞で知られる土井晩翠(1871～1952)など、漱石と関わりの深い学者・文学者らによる活躍がみられるのである。

当館では漱石文庫資料は早くから閲覧利用に一定の条件を付し、保存環境の整備に力を入れるとともに、

マイクロフィルムや電子媒体による利用公開を推進してきた。原本についても、保存装備の付加や原本修復による長期維持に努めてきた。

しかし、修復保存事業について長年助成を受けていた本学関連の財団が近年解散し、経費面の問題から修復等の対策が一時的に中断する状況が起きた。加えて目覚ましい技術革新により、従来画像の相対的な鮮明化が顕著で、この結果、代替メディアが存在するにも関わらず、原本調査や直接撮影の希望が寄せられる事態となっている。

平成 28 年度には、未着手であった漱石文庫和漢書の状態調査が行われ、その結果が報告された¹。本報告では、調査の過程で、従来漱石研究において多く光の当たってきた洋書ではなく、和漢書にも今後の研究材料となり得る貴重な漱石の痕跡が残っていることが指摘されている。

漱石文庫の劣化原因には、受入前からの破損に加え、受入が戦時中であったために応急的な処置しか施せなかった図書館の事情があり悔いとして残る。このときの不十分な手当てが、後年資料に対し好ましくからぬ状態をもたらした面は否めない。

今回の修復事業では、このような認識を踏まえて、特に過去の図書館による修復手当が、漱石生前の資料のオリジナル性を阻害していると判断されたケースを中心に、改装を含めた原状復帰を図った。

損傷状況と修復について

今回修復を行った資料 5 点について、損傷状況とその対処について記す。目録記述は『漱石文庫データベー

ス』により、第一冊表紙の大きさを加えた。

1 「漱石文庫和漢書の保存状況について」大原理恵『東北大学附属図書館調査研究室年報』4 2017 年 3 月 27-34 頁

○**對鷺句集** 漱 1159 文化7(1810)年 写本 小山宴長ノ奥書アリ 1冊 15.9×11.0cm

小山宴長(武矩・享保18年(1733)ー文化10年(1813))は、肥後熊本藩士で俳諧を能くした(国書人名辞典)。漱石文庫には小山宴長関係の俳諧資料が数点(下記参照)含まれており、漱石と俳諧・熊本との関連の観点から注目される。

『おくのほそ道』(漱 1134)

天明5年 小山宴長写 1冊

『新古發句集』(漱 1157) 湖長等

写本 小山宴長ノ奥書アリ 1冊

『續猿蓑』(漱 1158)

寛政3年 小山宴長写 1冊

『俳諧畫錦抄』(漱 1172)

寛政4年 小山宴長写 1冊

【損傷状況】

- カビによる損傷が甚だしい。
- 資料が開きにくい。
- 保護用表紙は東北帝国大学附属図書館のもの。
- 一部文字を修正した箇所がある。编者によるものと推定される。

【対処】

カビ・その他の原因による汚れを洗浄【写真1】【写真2】し、紙が失われている部分を補い、綴直した。この時、保護用の表紙は除去し、修復前は1冊であったが2冊に分けて綴直した。内容から【写真3・修復前】の位置で分けた。表紙は、一部残存していた後表紙【写真4】を参考に、新たに作成した。また、後表紙を解体した際に確認された反古については、紙を補い、本文の末尾に綴じた【写真5】。文字の読める方向に上下を変更している。帙は新たに作成した。洗浄後の確認の結果、朱筆の一部(肉眼での確認が困難な部分)には専門家が補彩【写真6】を行った。色の違いで補彩であることを明らかにし、また除去可能な状態にしている。

修復の際、洗浄等を行う前に袋綴となっていた紙を開いた状態で修復業者が撮影した(全丁)【写真7】。また、

一部紙を貼って本文を修正した箇所については、紙を除去した状態を修復業者が撮影し【写真8】その後紙を元の位置の戻した。補彩を行った部分については補彩前の状態を撮影した。

なお、修復の結果冊数が1冊から2冊となったため、目録記述を修正する必要がある。

○**俳諧一葉集** 漱 1162 古學庵佛兮 幻窓湖中編 文政10(1827)年序 東都 青雲堂 前編(5冊)後編(4冊)計9冊 17.9×11.8cm

漱石にとっては『俳諧一葉集』は手にしておきたい基本図書であったと思われる²。このことも考慮し、修復対象とした。

【損傷状況】

- 虫損が甚だしい。特に漱石の蔵書印部分が失われるおそれがある。【写真9】

【対処】

虫損部分の補修【写真10】を行い、帙を新たに作成した。なお、一部もとの位置が不明である断片は別に保存している。また、修復の際に除去した角裂・下綴の紙縫・綴糸等も保存している。綴直しに用いた糸は、修復時に最も古いものと思われた紺色の糸に近いものを用いたが、漱石が所持していた際の糸は、その後に用いたと思われる、紫の糸であったかもしれない。東北大で最近の修復に用いたのは黄色の糸である。

○**寶物集** 漱 1287 平康頼 寛文元(1661)年刊 3巻 3冊 25.8×17.8cm

【損傷状況】

- 開きにくく、文字が読みにくい部分がある【写真11】。
- 表紙は附属図書館で作成したもの。

【対処】

表紙を除去し、新たに表紙を作成し、綴代に紙を補い綴直した【写真12】。修復前は四目綴であったが、本来は五目綴であったことが針穴から推察された【写真14】ので、五目綴とした。これらの修復に当たっては、狩野文庫本³【写真13】等を参考とした。一部虫損を修復し、帙は新たに作成した。

2 注1と同 31頁

3 寶物集 三巻三冊 狩野文庫 2-2765-3 寛文元年 大坂 高橋清兵衛

○**扇面書畫帖** 漱 1359 (清) 曾友芝等書画 1帖 扇面実物 12枚張込 33.0×47.0cm

漱石文庫には本格的な書画作品は少ない。本資料の元の題簽の文字は不鮮明で【写真20】、資料名は整理用名称である。「光緒」等の記がある。

【損傷状況】

○画帖の装丁が、表紙が剥がれ、各見開きが全て離れた状態になっている。

○表紙の絹・画帖の縁が損傷

○書画本体にも損傷・汚れが見られるが、本来団扇であったものを解体して書画帖としたものと推定され、その段階で既にある程度の汚れや傷みがあったものと思われる。修復のため台紙から剥がしたところ、以前に補強等を行ったことが確認された。【写真17】

【対処】

表紙補修の結果もとの受入印等は見ることができなくなったため、受入の情報は図書館で補記した。損傷していた縁は再利用は困難であったため、似た縁(作成当時に近い年代のものとして推定される紙)を新たに補った(もとの縁の紙は別に保存)。

書画の順番が、本来の順序とは異なっているものと推定されたため、裏側の虫損・汚れ・紙を剥がした痕などを手掛かりに、順序を変更した。修復前に重ねられていた順序は【写真15】の通りである。

書「戊」は、裏打の紙【写真19】で色を調整していたが、同じ水色の紙で裏打を行ったところ、相当な相違が生じたので、赤紫に近い色の裏打に変更した。また、一部専門家による補彩を行っている。その詳細については、別に記録を作成した。

補修前の状態を修復業者が撮影した。一部は修復経過の画像がある。また、修復前の虫損等の状況(裏面)は調査時に図書館側で撮影した【写真16】。

なお、漱石の手元にあった頃の状態の復元を原則としたので、装丁に大きな変更は加えなかったが、閉じた際に書画が接触しやすい状態にあり、将来は書画部分の保護のため装丁の変更を行う選択をせざるを得ないことも考えられる。

○**太平記鈔 附 音義** 漱 1430 世雄房日性 慶長15(1610)年 要法寺版 40巻附2巻 10冊 徳運ノ書き入レアリ 27.9×20.3cm

本資料は、漱石旧蔵書ではなかったとしても、年代や古活字版である点等から、現在の本附属図書館の基準では貴重図書となる。本書については、小秋元段氏の論考⁴がある。

【損傷状況】

○虫損が甚だしい【写真21】。特に表紙の損傷が著しいため、保護用の表紙が追加されている。一方で、表紙の見返が剥がれているため、表紙裏反古を観察できる状態【写真22】にあり、既に小秋元段氏の研究⁵が発表されている。

【対処】

保護用の表紙を除去。綴直しには、解体時に取り出された糸【写真26】が元の糸に近いと考えられたので、これに似た色の糸を使用した。もとの綴糸・下綴の紙縫【写真25】は別に保管している。表紙は元の表紙を修復したものを使用した。現在表紙に題簽はない。保護用表紙の題簽(後補)は、保護表紙の見返をはがしたものに貼付け、本文の末尾に【写真23】綴じた。

表紙裏反古については次のような方法が考えられた。

A: 解体時に反古を撮影し、本来の状態に戻す。

※反古は閲覧できない状態になる。

B: 反古を取り出し、裏打をして、それぞれの本文の末尾にまとめて綴じる。

C: 反古を取り出し、裏打をして、別冊にして綴じる。

D: 裏打をして、表紙にたたみ込み、見返を貼らない状態を保持する。 ※修復前に近い状態

利用する研究者・修復業者・資料を管理する図書館担当係等の意見を確認し、検討の結果、Cの反古を別冊【写真24】にして綴じる、という方法をとった。この方法は、本体冊子に負担をかけず、反古の調査を容易にする一方で、管理上の問題があることが指摘され⁶ており、保管には特に注意する必要がある。表紙を解体した際、反古の状態【写真27】を修復業者が撮影し、本来の位置が確認できるようにした。反古を別冊としたため目録記述を修正する必要がある。

4 「要法寺版をめぐる覚書」小秋元段 『藝文研究』95 慶應義塾大学藝文学会 2008年・『太平記と古活字版の時代』小秋元段 新典社 2006年・増補版 新典社 2018年

5 同上

6 『表紙裏の書誌学』渡辺守邦 笠間書院 2012年 13頁・116頁参照。「本体と反古とが泣き別れになる可能性の高い」(116頁)。



修復を終え、新たに作製した帙に取められた資料

展示会公開

今回の修復対象資料については、漱石の所有した証を保存することが重要であった。例えば漱石の蔵書印であるが、虫損によりこの印そのものが欠損しつつあり、完全に失われる危険に晒されていた。利用についても、水濡れ、カビによると思われる部分欠損等のため、閲覧に支障をきたす状態にあった。虫損が蔵書中最もひどいものが含まれ、修復の緊急性が高いものであった。

このような状況であったものが、今回の事業により十分に改善されたことから、原本の調査活用や展示出陳等が再び可能となった。さらに帙の改装や新規作製により、資料にかかる負担が格段に軽減され、長期的な保存の見通しが得られた。

この成果を広く一般に周知公開するため、平成30年2月1日から13日までの間、館内多目的室を会場に「修復資料公開展示」として「漱石文庫を守る～修復とレプリカ展～」を開催した。

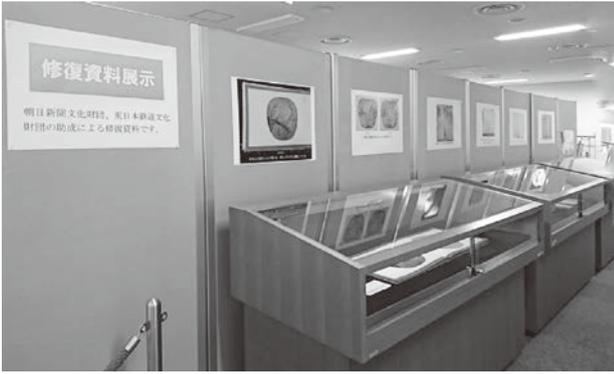
本展示には、修復資料5点の他、過去に製作した漱石文庫資料のレプリカからいくつか同時展示し、学内外に当館の保存事業を理解いただく機会とした。その

際、修復資料には両助成団体による支援をいただいたことを明記し、修復前写真を並置することで、どのような背景と方針をもって修復が行われたか、観覧者に理解できるよう工夫を施した。

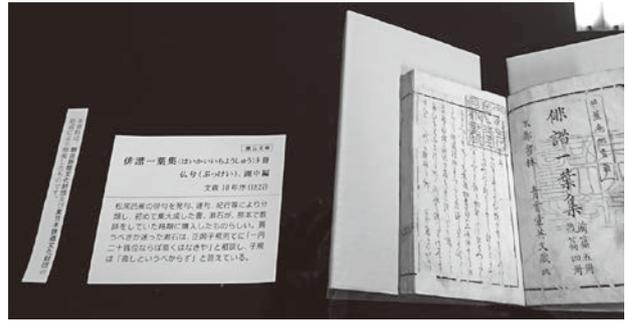
さらにこの機会を利用して、館内職員を対象に、資料修復をテーマにしたギャラリートークを実施した。幸い館員の関心は高く、参加者は熱心に説明に耳を傾けていた。資料保存について、直接修復を担当する係以外の館員においても日常に意識を高く保ち工夫と努力を行っていることを痛感した一コマであった。このような土台のもとに、内外の理解と協力を得て初めて本事業を遂行し得たことに感謝している。

謝辞：本事業をご支援いただいた朝日新聞文化財団及び東日本鉄道文化財団に、ここであらためて謝意を示すものである。

(さくち よしなお、附属図書館情報サービス課貴重書係長
おおはら りえ、学術資源研究公開センター助教、
附属図書館協力研究員)



修復資料公開展示



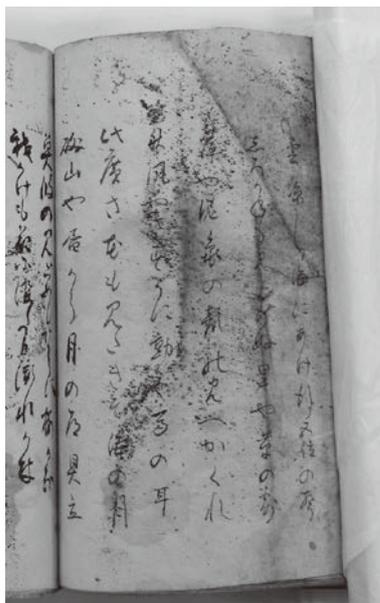
展示の様子



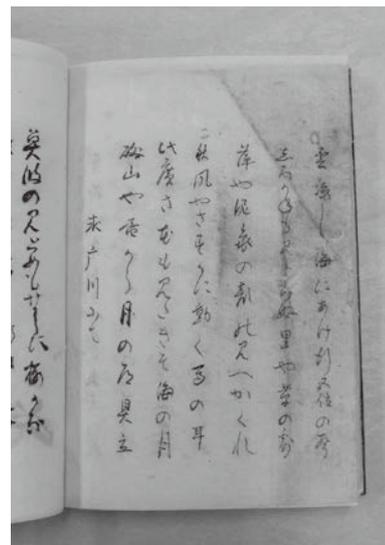
公開展示時に実施した教員によるレクチャー

【写真】

○對鷺句集



【写真1】修復前



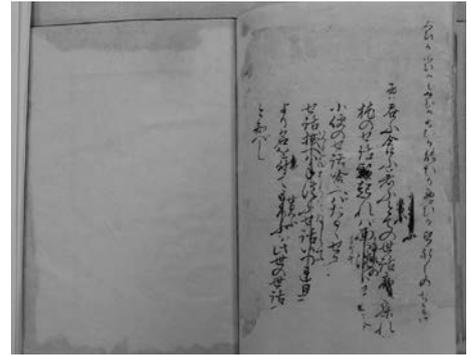
【写真2】修復後



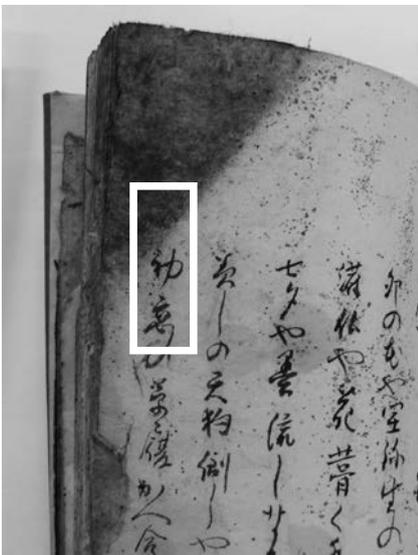
【写真3】



【写真4】



【写真5】



【写真6】



【修復前】

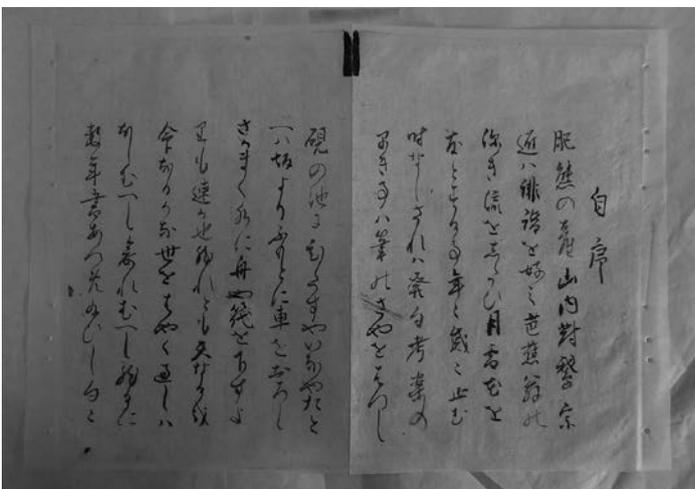


【修復後】

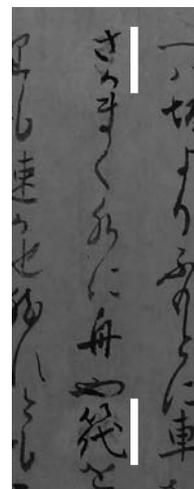


【補彩後】

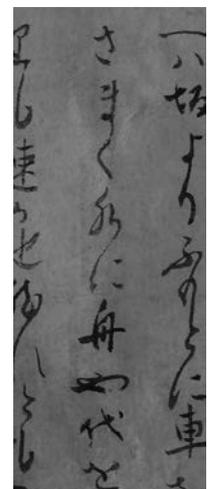
写真では分かりにくいですが、文字上部の朱の丸印に補彩



【写真7】



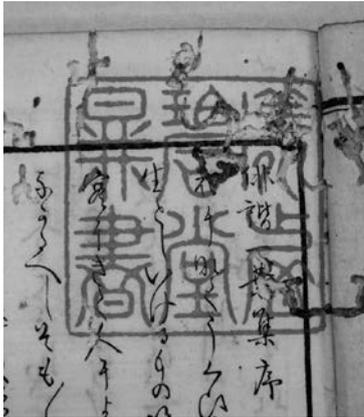
修正紙（傍線箇所）
取り外し前



取り外し後

【写真8】

○俳諧一葉集

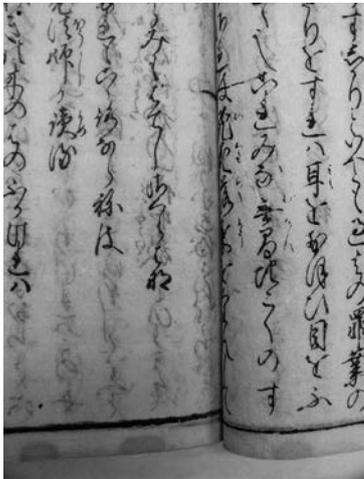


【写真9】修復前

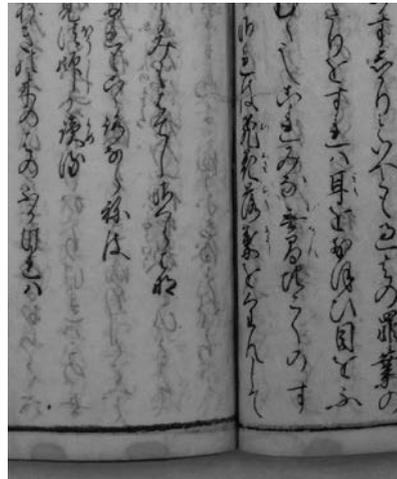


【写真10】修復後

○實物集



【写真11】

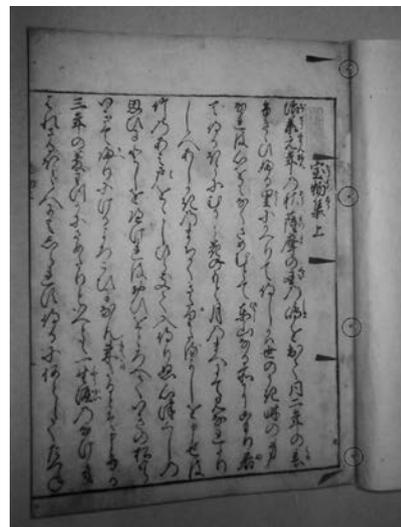


【写真12】

▲の矢印が置かれている位置に、本来の穴が認められる。
○印は現状（修復前）での綴じ穴の位置。



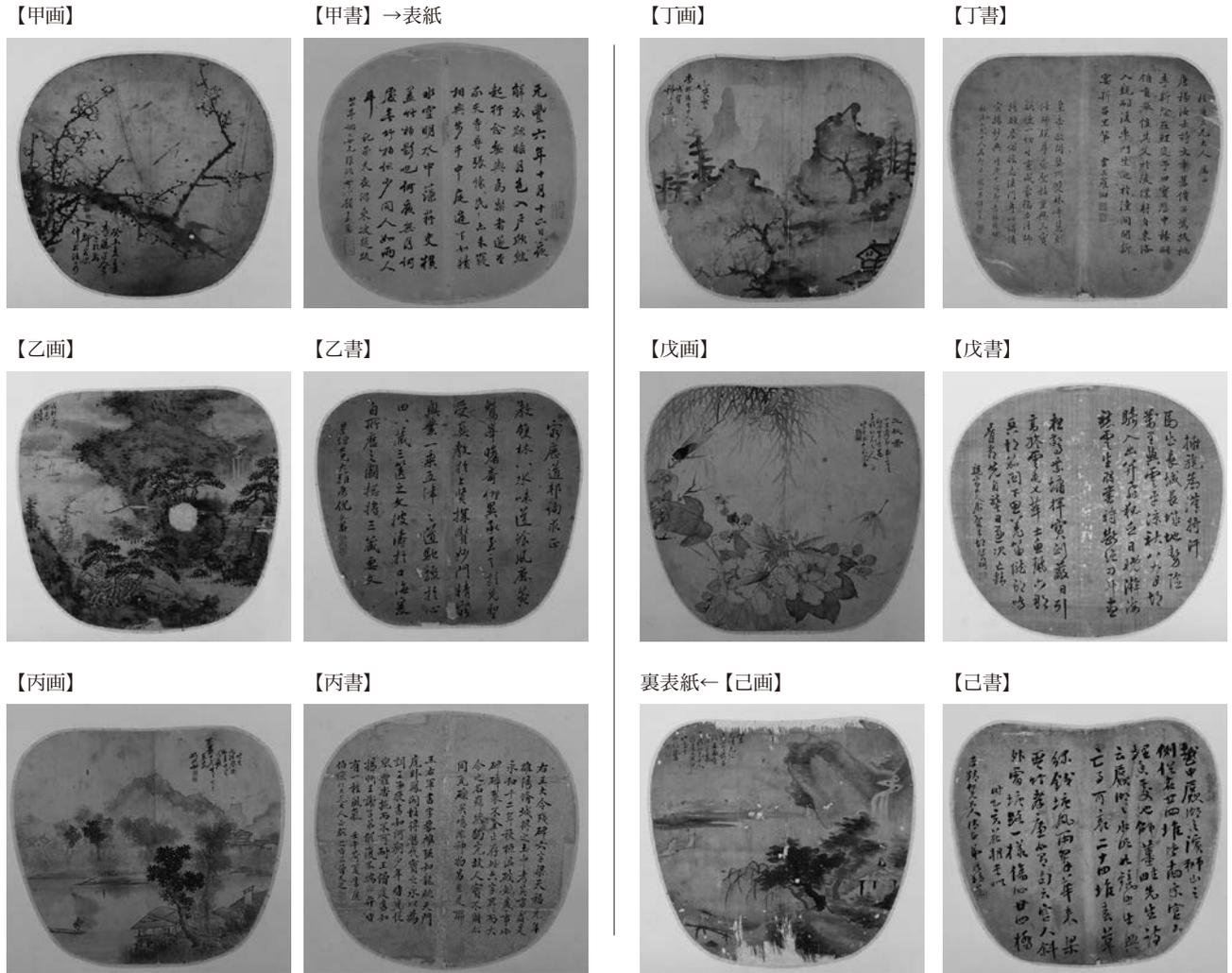
【写真13】



【写真14】

○扇面書畫帖

【写真15】配列 (修正前)



※修復後、虫損や紙を剥がした痕から、①戊②丁③丙④己⑤乙⑥甲の順序に改めた。



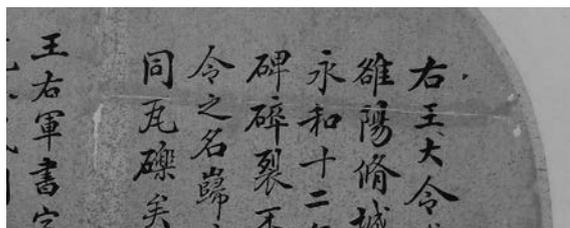
【写真16】

←「イ」「ロ」「ハ」手掛かりとした虫損の一例

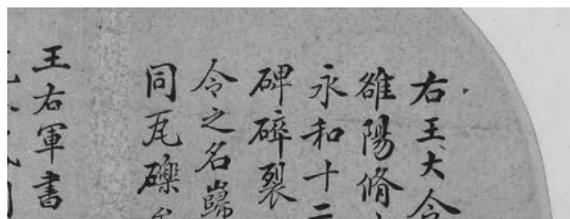


【写真17】【修復前・裏面】【修復業者撮影】
※損傷部分が補強されている。

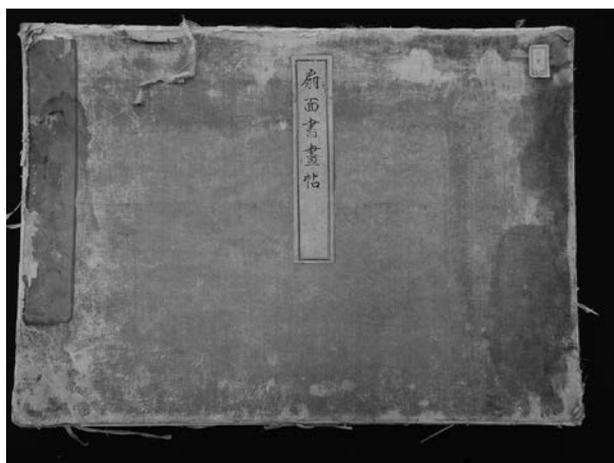
【写真18】
【修復前】



【修復後】



【写真19】【修復前】上部に僅かに裏打の紙の色が見えている。



【写真20】【表紙(修復前)】【修復業者撮影】

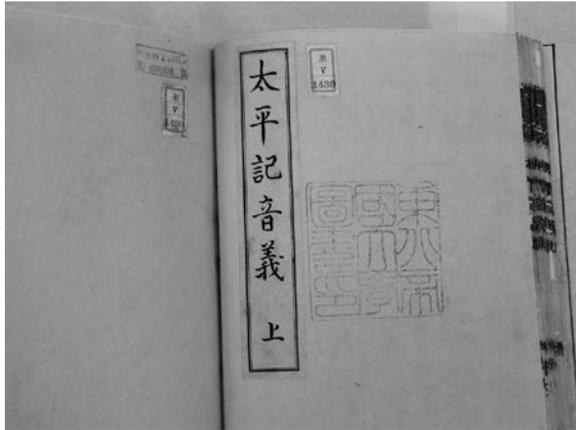
○太平記鈔



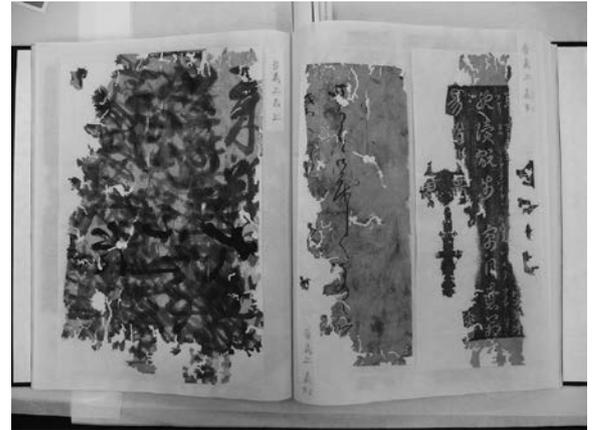
【写真21】



【写真22】



【写真 23】



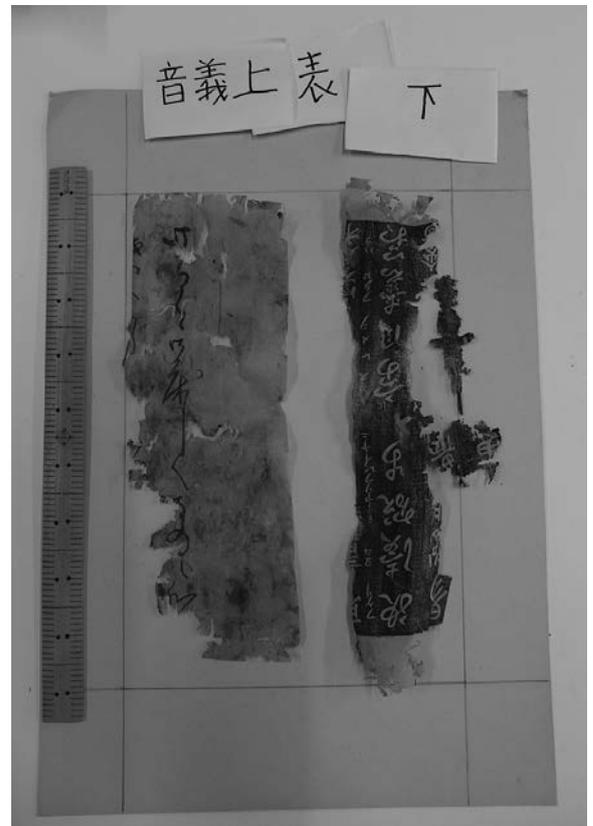
【写真 24】



【写真 25】



【写真 26】



【写真 27】 縦横の線で囲われているのが元の表紙の位置